

日本災害史研究プロジェクト

プロジェクト代表：文学部・教授 山崎 有恒

本研究プロジェクトは、近代日本（特に京都エリア）で起きた主要災害をターゲットに、その実態を明らかにするとともに、そうした自然災害に対して当時の人々がどのような意識を持ち、どのような対応を試みたのかを明らかにしようとするものである。

近代京都の歴史災害については、これまであまり通時的な研究がなされてこなかった。もちろん幕末の禁門の変におけるどんでん焼きのように、その被害状況や主たる要因、その後の京都市域への影響などが個別に分析されているものは存在しているが、近代から現代にかけて、人々と自然災害とのかかわり方、特に人々の意識と行動がいつ、どのように変容したのかを追う研究はほぼ皆無であったと言えよう。

確かに近代京都においては、それまでの歴史的災害と比較しうるほどの大火災や大水害、大地震などは発生していない。しかし小規模な災害は絶えず発生して、人々を悩ませ続けたし、何よりも「近代化と西欧化」をテーマとした、明治維新という、世界的な文化大革命において、人々と自然災害との関係性がどのように変容したのか、それは現代と未来の防災の在り方に対して、どのような影響を与えているのかを明らかにすることは、過去の大災害について検討するのと同様の、いやそれ以上の重要性を持つ研究テーマであると確信しているからである。

本プロジェクトは、それをこの長い期間中、恒に発行され続けてきたメディア『京都日出新聞』を素材に行おうとしてきた。具体的には、この新聞メディアに掲載されているあらゆる自然災害記事を取り出し、5W1Hを中心にデータベース化するとともに、特に人々と自然災害との関係性が読み取れる史料については、全文書き起こして、近代京都歴史災害史料集として別途刊行しようという計画であった。この計画に基づき、研究代表者山崎有恒の元に若手研究者、院生、学部生が集う京都歴史災害史料研究会を立ち上げ、歴史災害記事のデータベース化を推進しつつ、同時に史料集についても原稿を集めていくという手段で研究を継続し、10年以上に及んでいる。

そしてこれまでに、『明治後期京都歴史災害データベース』『大正期京都歴史災害データベース』『昭和初期京都歴史災害データベース』と、三本の報告書を刊行してきたのである。残るは明治中期の15年間と、昭和戦中期の10年間で完成させれば、それで戦前の方はすべて刊行済みということになる。2020年度については、このうち昭和戦中期10年分を完成させようとした。

結論から言うならば、これはほとんど果たせずに終わった。まずこの研究プロジェクトのかなめである京都歴史史料研究会がコロナ禍により、キックオフミーティングのみ開催して、以後休止を余儀なくさせられたこと、主たる活動場所である立命館大学図書館など公共図書館がのきなみ休館となり、調査活動ができなかったこと、さらにキャンパス内での団体での集會がかなり厳しくなり、また講義の多くがオンラインとなったため、学生がほとんど大学に出ないという事態が発生、結局現段階でも再開のめどはたっていないのが実情である。

これについてはコロナ禍の早期終結を待つほかはなく、その目途がついた段階で、速やかに組織化できるように水面下での調整を続けているところである。

したがって今年度の研究活動は、代表の山崎が個人で進められるだけ進めた災害史研究が中心となっている。緊急事態宣言下を除き、出張調査が可能だった時期には、東京・神奈川の史資料館で、関東大震災を中心とする災害記録を調査・発掘した。

またこの間世界を席卷したコロナ禍が自然災害と同様の「災害」であるにとらえたとき、それについての人々の意識と対応もまた、自然災害に対するものと同様のシフトチェンジをしていることに気付き、これまでは対象としてこなかった感染症災害も研究対象に加えることとした。特にそれまでの漢方医学の世界から西洋医学の世界への転換が、いわゆる近代化と西洋化のスローガンのもとで、コレラ病をはじめとする感染症の大流行により引き起こされたことについて、自然災害における転換の在り方と酷似していることから、その連関性などを追及する新たな研究課題が生まれつつある。とりあえずは、基礎的な文献の調査と、基礎的な史料の所在確認から始めている。今年度については、千葉県柏市が所蔵するメ木一郎家文書や新潟県立文書館が所有する六日町漢方医師文書などの調査を行った。総じてこの間の漢方医師たちの研究は遅れており（いや、事実上手付かずだったといっても良い）、それに比べ資料自体は膨大に残っているということで、歴史災害の研究では今一つ見えてこない、ないしは単線的にしかとらえられない人々の意識と行動の変容を複眼視することができる重要な切り口であると考えている。

とにもかくにもコロナという「災害」により、研究活動が大きく制約された1年であったと整理できよう。新年度の早い段階でコロナ禍が収束し、また通常の研究体制に戻ることを祈るのみであり、その時こそ残された課題を達成して、これまでのプロジェクト研究に一区切りをつけたいと考えている。